

## 64年東京オリンピックの思い出

1964年10月10日。東京オリンピック開会式の日。高校1年生の僕らは午後、サッカー部のトレーニング中だった。午前の授業後は家に帰ってオリンピックの開会式を見たいというのが1年生部員の本音だった。もう校舎には誰も残っていない。夏を思い出させるような日差しの中で1時間以上練習が続いていた。

いつものことながらコーチ役の先輩Aさんに叱咤されグラウンドを走り回り、誰もがかなりへばっていた。その時、Aさんが「空を見ろ」と叫んだ。ブルーインパルスの機体が五輪マークを快晴の空に描いていた。オーッと声を上げて皆が仰いだ。その後

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

の練習がどうだったかは思い出せないが、その一瞬、疲れが飛んだことを覚えている。

今から半世紀以上前のことなのに、64年の東京オリンピックのことはよく覚えている。グラウンドで見た開会式のブルーインパルスだけでなく、サッカー後進国だった我が国が、釜本、杉山らの活躍で想像もなかった準々決勝進出

(注…68年メキシコ五輪では3位)。そもそもオリンピック以前の日本には芝生のサッカーグラウンドすら無く、国際試合でも後楽園競輪場の芝生で開催されたりもしていた。ローマの裸足のアベベは東京では靴を履いて2連勝し、ゴールした後も余裕の姿。メキシコ五輪を前にして自死した円谷選手が競技場に入ってからヒートリ―に追い抜かれる苦しみに満ちた顔。鬼の大松に率いられた東洋の魔女と呼ばれた鐘紡貝塚のチームが強豪ソ連を破った決勝戦。女子体操のチャフラフスカの優雅な演技。今の体操と比べるとその技術レベルは素人目に見ても雲泥の差があることはよくわかるが、観客はその演技の美しさに酔いしれた。そして、日本の神永を押さえ込みで破り、日本柔道界を震撼させたアントン・ヘーシンク。日本柔道が外国選手に負けたという驚きだけでなく、ヘーシンクの勝利に興奮したオランダ人観客が試合場が上がってきたのを手を挙げて制したヘーシンクの姿も強く記憶に残っている。今回のオリンピックで日本は多くのメダルを獲得し

たが、日本選手の中にも勝って畳上で喜びを爆発させる姿があった。ましてや海外選手にはあのヘーシンクの柔道家としてのマナーは伝わっていなかった。

今回の東京オリンピックも64年の夏を思い出させるような猛暑の中で開催されている。しかも、コロナ禍それも緊急事態宣言が出される中で無観客開催されている。今の高校1年生は半世紀経った後に、今年のオリンピックをどのように思い出すのであろう。

オリンピックの開催そのものが日本にとって記念碑的なことだった64年。オリンピックに間に合わせるように新幹線ができ、首都高速道路も開通した。三波春夫が歌う東京オリンピック音頭はその後の町場の盆踊りでは定番として流されていた。

今と比べて、選手の競技レベルの高さや言うに及ばず、日本という国の経済的豊かさも比較にならない。オリンピックの勢いを引き継いだ大阪万博。経済成長は続いていくが、その時代、日本の公害被害も最高度に達していた。それも我が国は克服してきた。64年のオリンピックをこれほどまで懐かしく思い出すのはなぜだろう。